

「然 り は 然 り」

イザヤ書

マタイによる福音書

第66章 1節～2節

第5章 33節～37節

説教 岡村 恒牧師

「あなたがたの言葉は、ただ、しかり、しかり、否、否、であるべきだ。」(37節)主イエスが《山上の説教》の中で、心が踊るような約束の言葉に続いて、律法に光を当てて語られた言葉です。律法の言葉をとりあげて、『あなたがたは…と聞いているが、しかし、私はあなたがたに言う。』と新しい言葉を語られました。律法を、幸せに生きるための方法か何かのように読んでしまう私たちに向かって、神の言葉が、『神がいったいどういうお方か』、また『神がわたしたちのために何をしてくださったか』を語っていることを、主は教えて下さいます。

この日主イエスは、「いっさい誓ってはならない。」(34節)と明言されました。つい先月、主イエスのご受難の物語に目をとめた私たちは、主の弟子ペテロが「『その人のことは何も知らない』と言って、激しく誓いはじめた。」(マタイによる福音書 27章74節)場面を思い出します。命をかけるような場面で、あるいは日常生活のささいな場面で、当時の人々は誓いを立てました。確かに聖書には、神に対して誓いを立てて、神の祝福を受けた人々が大勢登場します。誓いを果たし、約束を守るようにと聖書も繰り返し求めています。ところが主イエスは、私たちの誓い、約束の問題を明らかにされたのです。

古代社会では、土地の売買契約のような際に、しばしば動物の血が流されました。命がけで約束を守ることのしるしでした。主イエスは、神と人間との契約について思い出するように、と促されます。十戒が与えられた時、神はまず宣言して言われました。「わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である。」(出エジプト記 20章2節)守るべき戒めを与えて、これを守って生きようとお求めになったものではありません。神はまず、神の民を奴隷の家から救い出して解放されました。死と滅び、絶望から解放して下さった神と、どのような関わりを持ってこれから生きていったら良いか、十戒はその道筋を示すものです。どのように神に感謝し、その愛にこたえて生きたら良いかを明らかにしています。

人は、天をさして誓い、地をさして誓う時、自分の言葉を保証するものとして天や地、エルサレムの神殿を引き合いに出して誓います。しかし主イエスは、その約束がもうすでに誠実さを失っていることを看破されました。本当に真実な言葉が語られ、なお言葉に力があるなら

わざわざ何かにかけて誓う必要などない、と言われるのです。主イエスご自身はいつでも、何にも保証される必要のない、力のある言葉を口にされました。その言葉によって病気がいやされ、死人が墓から引き出されました。主が祝福の祈りを捧げられた時、わずかのパンが大勢の人々を満腹させました。いよいよ十字架の上で殺される時でさえ、ご自分を殺そうとする者のために赦しを祈り求め、私たちにかわって絶望の叫びを上げ、神に一切をお委ねになって死なれました。

主イエスは、神にかけて誓う必要などありませんでした。主イエスご自身が真実なお方であり、その言葉が、決して変わることはない真実な言葉だったからです。主イエスは、真実な言葉だけをお語りになりました。主イエスの力ある言葉は、私たちを死と滅びから解放し、神の愛にこたえて生きる者へと造り変えて下さる言葉なのです。

私たちが神の前に立つ時、私たち罪人はひとり残らず神の「否」を聞くはずでした。神は聖なる方、真実なお方ですから、私たちは誰ひとり見逃されることなく、死と滅びに定められるはずでした。だからこそ、主イエスはこの地に来て下さいました。神のみ心に適わない私たちの「否」を、あの十字架の上ですべて引き受けて下さるためでした。神に見捨てられる絶望の叫びを、神の「否」に対する叫びを、主イエスが、私たちに変わって叫んで下さるためでした。

それゆえ、主イエスを信じる者は、神の「しかり」を聞くことになりました。「否」を「否」とする徹底的な裁きが、あの十字架の上で行われたので、「否」と言われるはずの私たちに、今や神の「しかり」が語られることになりました。

今、私たちに神の赦しと恵みの言葉が響いています。主イエスを信じる者に、神の「しかり」が響いています。「あなたは私の愛する子。わたしの心にかなう者」という神の宣言が響いているのです。私たちは、自分自身の内に真実がないこと、神の「しかり」を受けることができないことを知っています。ただ神の生ける言葉、主イエス・キリストの真実によってのみ、神の赦しの宣言、神の「しかり」を聞くことができます。そして、神の愛にこたえて歩み続けることができるのです。

(記 岡村 恒)